内務省土木局長の異動

路政僧

協力内閣論。相容れない政策を持つ政民兩黨が協力して内閣を組織すると言ふやうなことは、不可能であるばかりか憲政の常道に反した非立憲的な考案だが、夫れを目論んだが爲に民政黨内閣は瓦解して、犬養政友會内閣が成立した。次に必然的に來るのは地方長官の交迭である。併し良く考へて見れば憲に詰らないことで、事務官であるべき本省の局長や地方長官が内閣の變る度毎に沈んだり浮いたりするのは、政務と事務とを混着した遣り方で排すべきことだが、夫れが慣習に爲つてゐるので今更兎や角言つて見た所で人心を喚起せしめないであらうが、私情乃至感情やらで色眼鏡をかけて人を評價し、良二千石をぼんとの浮草のやうに取扱ふのは、事務の能率を擧げる點から言つても、可い地方長官を養成して國勢を進展せしむる見地からしても、國家的損害と言はねばならぬ。之は獨り政友會に言ふのではない、民政黨にしても同樣であつて、此人事問題は超黨派的に考へねばならぬ重大問題である。

夫れは夫れとして他日論議するであらうが、政友會が曾て田中内閣のときに行つた地方長官の交迭は世上非常な非難を受けて、内閣全體の不信を蒙つた苦い體驗を持つてゐる。此度こそは新味を見せるであらうと期待された世上の批評を恐れたのであらう、月曜會浪人組の中から若手を引き拔いて澤山にゐる浪人組の策動を排したのは先づ成功と言つて可いだらう。唯だ齋藤大阪や小幡新潟、尾崎愛知の古顔が歸り咲きしたのが、玉に疵と言つたところであら

う。併し內務本省の首腦部の人選は新進を据えたので好評を博してゐる。此の騷動で我が土木局長丹羽七郎氏は社會局長官の榮位に就き、其の後任に宮城縣知事湯澤三千男氏を迎へることに爲つた。

○

丹羽氏が埼玉縣知事から內務省土木局長の椅子に就かれたとき、土木局員の總ては勿論、地方の土木關係者が明かるみへでも出たやうな氣になつて喜んだ。夫れと言ふのは土木行政通の氏を迎えたので土木行政の將來に期待した勢であつた。夫れに加へて不景氣な緊縮主義に走つてゐた濱口內閣よりは、少し積極的に傾きかけてゐる若槻內閣だつたから、一層其の感を强からしめたのであつたが、矢張り井上藏相の緊縮主義の爲に新規事業は一切見合せ、既定豫算までも削減する。二つの土木出張所は廢止する、既に政府が手を附けてゐる河川や港灣の事業の一部を地方に移すと言つた調子で土木行政は最難局に遭遇した。之が爲に土木技術官數百名は馘首される結果を齎すので、彼等は聯盟して事業縮少案に反對し、若し聽かれなかつたときは全國的に總辭職するとまで言つて騷いだ。氏は此難局に方つて良く切拔けたのである。

丹羽七郎氏

世は擧げて不景氣に惱んでゐるとき、既定事業までも繰延べて失業者を候出せしめ、一方に於て其の失業者を救濟する爲に、新事業を起すと言ふやうなことは、餘りに非常識なことだが政府の方針である以上夫れに從ふの外なかつた。そこで氏が計畫したのは例の大正七年度に於ける失業救濟大土木事業計畫である。卽ち既定豫算に於て繰延された河川、港灣事業を復活し、新たに道路、河川、港灣の事業を起して失業者を救濟すると言ふのである。殊に從來から屢〻計畫されて實

現しなかつた中小河川の改良事業も亦起工することにして新味を見せた。今でこそ内閣が交迭して此豫算案は潰滅の運命に置かれ、丹羽氏が奮闘した功績が酬ひられないのを遺憾とするが、此大土木事業は矢張り現内閣に於て更に建てらるべき土木事業の基根と爲ることは當然であるから、氏も亦以て慰すべきであらう。と、言ふのは消極主義を採つた前内閣に於てさえ此大事業を目論んだ、積極主義を高調してゐる現内閣は、夫れ以下の計畫を樹つべき道理が無いと言ふやうに現内閣の土木行政を掣肘するからである。

氏の在任僅に八ケ月、土木局の最難期に於て良く奮闘され、土木技術官の騒動を鎮めて事なきを得しめた其の手腕等を想起するときは、せめてもう一年位在任して貰ひたかつた。土木行政に卓識ある氏をして腕を伸ばさしむる餘地を與えないで轉任せしむることは、筆者が前に言つたやうに國家的損失である顯著な表はれであらう。榮轉の噂を耳にしたとき、政府は何故に無謀な人事をやるのであらうかと某幹部に尋ねたことがある。其とき幹部は、丹羽君の如き人物を土木局長に据えて置くのは國家の損失ぢやと言つたが、國家の大局から見れば或はそうであらう。氏が赴く社會局には勞働問題を始め、社會政策的事業が山積してゐる。氏が常に研究してゐた勞働問題に對する抱負を實現するのも亦此の機會であらう。土木局に於て振はしめ無かつた手腕を社會問題の解決に振つて貰ひたい。

○

新任局長湯澤三千男氏は、當年四十三の男盛り、四十五年東大經濟科の出身、福島縣屬を官海への振出しとして同縣の警視と爲り、夫れから福井縣足羽郡長、次で同縣理事官と爲り、大正六年内務書記官と爲つて本省へ這入つてから、昭和四年宮城縣知事に榮進するまで、十有四年間も内務省に勤めた人だから、此度の轉任は元の古巣へ歸つた形だ。殊に氏は官海への首途に土木課の仕事に從事されたさうだから、土木局としては何とは無しに懷し味がある。内務省時代は主として衞生局と社會局方面の事務に從事され、殊に衞生局では保健、防疫、豫防の各課に長と爲つてゐて

衞生局全般の事務に通じ、行く所相當好評を博してゐる。

氏に一度接した人は「愉快な男兒」と言ふ感を起す位に氣持の良い明かるい人だ。夫れに頭腦至つて明敏で事務を處理すること頗る速い、溫厚な質だが時と場合に依つては單騎敵地に乘込むで奮鬪する氣慨の持主である。曾て衞生局時代に明治神宮の競技問題で、文部省を向に廻はして一大論戰をやつたことや、社會局保險部長時代、全國醫師會との間に醫療報償金の値上げ問題が紛糾したとき、契約破棄を覺悟して現狀維持を固執し內相の仲裁をも容易に肯しなかつたことやらは、今も尙同僚間に有名な話である。

政友會內閣時代に於ける土木局は、丹羽氏が嘗たやうな豫算編制難に遭はない、至つて積極的な大豫算を樂に編制する事が出來得やう、併し土木局だけが積極的に惠まれるのでは無く、各省ともに同じことだから玆に又對各省の問題が起つてくる。土木局の計畫する中小河川の改良と農林省の用排水幹川工事との關係の如き、港灣改良と漁港修築の如き隨分複雜な問題がある。豫算關係でも此やうに色々想像されるが、其の他の行政に就ても、例の遞信省が計畫してゐる發電水利法の制定と、河川法改正の問題やら港灣法の制定やらは、何れも各省間との紛議が豫想される。是等の問題を解決するに骨つぽい氏を迎へたことは、吾人の頗る滿足するところであつて、人選宜敷を得たことを賞へる。丹羽氏に去られて悲觀した筆者は、湯澤氏の來任を迎へて同生の想がする。どうか一骨折つて我が土木行政の進展に盡して貰ひたいものだ。

湯澤三千男氏